

出発進行♪

『夢見る濱課長』

洋子くん、一緒にお風呂屋さん、入らへんかあ？ そ
らワイは女湯入れへんけど…そんな、男湯でええやない
かあ。

ワイなあ、潜水艦のプラモが大好きでんねん。お風呂
で遊べるやろ。ほら、見てみい。伊19や。こっちはUボ
ート。それからなあ、ほら！ 小澤さとの「サブマリ
ン707」。「青の6号」もあるでえ。こいつで遊ぼうや。

アメリカもんもあるんや。ほら「ノーチラス」。こっち
は原子力潜水艦「シービュー」や。

マニアックやったかなあ、^(^^)

(渋谷14・10・16)



むねヲちゃんは、ちょっとおませな小学五年生です。
彼の組には、まきコちゃんと云って、学校の勉強はでき
るけれどワガママでガサツで品位のない、だけど気位ば
かり高くて扱いにくい女の子がいます。

でもむねヲちゃんは、そんなアクの強い彼女に片思い
していました。

土曜日の朝のことです。むねヲちゃんは決心して、ま
きコちゃんに日曜日のデートを申し込みました。

まずは朝礼の時に声をかけたのですが、相手にしてく
れません。

さらに休み時間、給食の時、昼休み、放課後と、執拗
に口説き続けました。

まきコちゃんが帰ろうとして上履きを脱いだ時のこと

です。背水の陣で挑んだむねヲちゃんに対して、ついに根負けしたのか、首を縦に振ってくれたのです。

約束をとりつけたデートの日がやってきました。

地下鉄に乗ってやって来た神宮外苑の広い芝生に、二人が仲良く(?)向かいあっています。むねヲちゃんは嬉しくてたまりません。まきコちゃんに食べてもらおうと、お弁当も自分でこしらえてきました。

「これ、食べなよ。ボクが作ったんだ」

「何これ？」

「まきコちゃんは、外国に行っていたことがあったでしょ。ご飯モノは好きじゃないだろうと思って……」

「ちよつと、それはイイけど掴めないじゃないのお！」

「あれ？ 具を挟み過ぎちゃったんだなあ。エへへ、でも食べごたえあるでしょ、エへエへ……」

むねヲちゃんは、精一杯の愛想笑いを浮かべています。

まきコちゃんは腹立たしげに、むねヲちゃんを睨みつけました。

「まったく、なんて重てえサンドなのよお」

(表参道 14・04・03)



洋子は濱課長のしつこい誘いに、ついに屈してしまいました。日曜日にデートさせられることになったのである。

彼女が「セクハラ」などと抗議しようものなら、濱はどうせ「レイオフ」をちらつかせるに決まっている。濱もついに悪辣な手に出たものだ。

しかもデートの場所は、彼の自宅だと云う。

♪ピンポーン

ついに洋子はやって来てしまった。

「お、来やはったワ」

濱は目尻を下げきって洋子を招じ入れた。

「ささ、むさ苦しいトコやけど、上がりはって」

怪しいこの男に相応しい、地域の入り混じった怪しげな関西弁である。

「今日はナ、洋子はんのために腕に撚りいかけて料理こさえたンや」

濱は両の腕を絡めあつた。

“撚りをかける”を動作で示しているのだ。いかにも詰まらないギャグである。

「どやっ！ 中華やでえ」

と云つたつて、セイロがテーブルに載っているだけだった。

「点心……？」

洋子がようやく口を開いた。

「そや、ほら中華饅やで！ まま、喰いなはれ」

恐々、口にした。

「課長、中華饅って……いったい中に何が入っているの？」

「具でつか？ 具は言え、まへん」

◆
(外苑前 14・04・13)

あお

やまいち

ようめ

あおや

まいにち

ようみえん

あおうや

まんいち

ようおみえ

嗚呼不条理也……青山一丁目

(青山一丁目―14・05・12)

◆
ピンさんは、保守派が多いと云われる東北出身であるものの、珍しく革新派です。メーデーには欠かさず参加しています。

彼の所属する会社は、組合活動にのめり込むピンさんを快く思っていない。

そんなことは全く意に介さないピンさん、今日も通勤電車に揺られています。事務所までは、およそ一時間の道のりです。東京では、まあ平均の通勤時間でしょう。車内は乗車率20%を超えています。

ピンさんは吊革に掴まり、噴き出す汗を拭おうともせずに、必死で新聞を読んでいます。

『お疲れさまです。あと三駅の辛抱ですね、ピンさん!』
ピンさんは混んだ車内で新聞を丸め始めました。どうやら読み終えてしまったのかな？

「おお、赤旗アみづけエからのお」

(赤坂見附―14・05・03)

◆
ただいま〜、帰ったぞ。

……..
玄関に井が出てたなあ。

……..
お昼は出前だったのか？

……..
ああ、別に咎めてる訳じゃないから、気にするな。

……..
いつまでも出しっ放しじゃみつともない。ボクが返しに行くであろうか。どこからとったんだ？

……
遠いからイイって？

……
ほお、日本橋から頼んだのか？ よく持ってきてくれたなあ。「地下鉄に乗って」？ どこかで聴いたようなフレーズだ。

……
そりゃそうと、日本橋のどこだ？

……
何々、井に書いてある？

……
ふむ、ん？

……
ほお「たいめいけん」さんの、か。

◆
(溜池山王・14・04・17)

タコ社長がいつも以上に赤い顔をして庭に入ってきた。右手には一升瓶が握られている。

「よお、さくらちゃん！ 相変わらず可愛いねえ。ヒック！」

「社長さんったら！ ずいぶん酔ってるようね」

「いやねえ、オレはまいっちゃったよ。ヒック！」

「どうしたの？」

「ウチみたいな零細の印刷工場はさあ、何てえのかなあ、近代化…分かる？ ツプ！」

「っっ？」

「近ごろの印刷はすべてコンピューターでさあ。DTPとかCTPとか、ちつとも分からなくなつてよお」

「っっ？」

「それだけじゃないんだよ。設備投資がおつつかないん

だ…はあ。ゲプツ！」

「また社長、そんなに呑んじゃ…」

「吞ませてくれよ、さくらちゃん。そりゃそ〜と、できの悪い兄貴はどこいったんだ？」

「お兄ちゃん？」

「おお寅あ〜ちゃん、お〜い、ど、どこにいるんだと、寅あ〜〜！ 吞もう!! よ、ね」

(虎ノ門 14・05・18)



1. 同情、思いやり・悔やみ、弔意・have {feel (a)} ~ for
the poor 貧しい人々に同情する

2. 好意、賛成、共鳴

sym·pa·thy

(新橋 14・04・14)



その辻では、武士とチンピラの睨み合いが続いていた。

「落ちぶれ果てても拙者は武士だ。誇りを傷つけられて

黙っている訳にはいかない！」

「けっ、何が武士だ！ 何が二本差しだ!! こちとら江

戸っ子でい！ 刀が怖くて天下の往来が、二本足で歩けるかってんでい」

「おのれ素っ町人、云わせておけば……勘弁ならぬ」

「おお？ 抜くつてえのかい。面白れえ、抜いてみやがれつてんでい、このサンピン！」

侍は柄に手をかけた。

「黙れ、町人！」

「おつ、抜いたね、抜けたじゃねえかいお侍さんよお、

くく」

「驚いたか町人」

「驚いたのオドロカナイのって、刀にじゃねえやい。こちとらてつきり竹光と思ってたぜ」

「先祖伝来の銘刀『備前治虫雪平』だ！」

「……雪平ってえのは鍋じゃねえのか？……」

「頭を下げるなら今のうちだぞ、町人」

「冗談云っちゃあいけねえや。頭下げるなあテメエの方で」

チンピラもイツチョマエに、短いながら刀を差している。

「売られた喧嘩だ、買ってやろうじゃねえか！」

「ほほう、町人のぶんぎいで武士に刀を向けるか。面白い」

「かかってきやがれ！」

チンピラはそう云っておきながら、自ら侍に切りかかった。

侍は愛刀でチンピラの刃を受けた。

“ザギ~~~~ン!!”

（銀座 14・05・12）



洋子は濱課長を見舞った。

濱は日ごろの不摂生が祟ったのだろう、緊急入院で手術するハメになったのだ。

洋子は病名を知らない。実は人に云うのものはばかられる病気だったために、誰にも教えていなかった。

彼女も彼女だ。病院にすれば、おおよその察しはつくだろうが。

「課長、具合はいかがですか？」

「ああ、見舞いに来てくれてありがとはん。手術のほう

は無事に終わりはった」

「よかったですね。では復帰は思ったよりも早いかしら」
洋子は日ごろセクハラ攻めにあっているにも関わらず、病人に対していたわりの言葉をかける。

「そうやな。お陰さんで術後の経過が良くて、今日、抜糸なンや」

(京橋 14・04・21)



山佐家の朝がやってきた。

台所には、朝餉の仕度で慌しくお香香(こうこう)を切る母親の姿があった。食卓では、父親が床の間を背に陣取り、新聞を広げている。

母親は台所での仕事が終わわり、食卓に惣菜を並べ始めた。

キッコがようやく着替えを終え、階段を下タドタと音をたてて降りてきた。

「キッコ、階段はもつと静かに降りなさい！ 女の子なんだから!!」

「何で女の子を持ち出すんだよお！ チェツ!!」

キッコは面白くない。

「朝ご飯な〜に〜?」

「朝は納豆と決まってる」

父親が無然と横槍を入れた。

「あゝあ、また納豆か……」

「文句を云わずに喰わんか」

「は〜い、いただきますま〜っす」

「うむ」

「ズルズル “……ねえお母さん、今日の御御御付(おみおつけ) ヘンな味だよお〜”

(作者注・味噌汁のことを東日本の多くは「おみおつけ」

あるいは「おつけ」と云う)

「あらそう?」ズルズル“……ああ、煮干使ったからだわね」

「えつつつ、煮干ダシ?」

(日本橋 14・05・31)

「美味しくな〜い!」



「見つかったか!?!」

「ダメです!」

「バカ者! 自信を持って云うな!!」

「は、はい! 申し訳ありませんでした」

へソ曲署捜査一課は、十年の歳月を費やしてようやく組織のアジトを見つけた。しかし踏み込んだ時には、既にモヌケの空だった。

どうやら情報が筒抜けだったようだ。重苦しい空気が流れている。

「ヤツらはどこに消えたんだ!」

そこへ捜査一課の外線直通であるダイヤル式黒電話が鳴った。主任刑事である伴が受話器をむしり取る。

「はい、こちら捜査一課……」

「おお! 判ったか?……」

「何だった?」

「船で……」

「何てこった……」

若い刑事が横ヤリを入れる。

「居場所が判ったのですか?」

「密航……」

電話に向かう伴刑事の声に刑事たちが反応を示す。

「密航?」

「密航！」

「密航!!」

「密航っ!?!」

血気にはやる老練な刑事たちが電話のやり取りに聞き耳を立てる。

「キャツらはどこへ密航を企てたのですか!?!」

伴は鬱陶しげに電話に集中する。

「密航……島へ?……」

◆ (三越前-14・05・06)

「そこを右にゆくと煙草屋があるはずだ」

「おお、あるジャン」

「次の角は左だな。するとペンキ屋がある」

「やややつ、ホントだ！」

「そろそろ近いぞ」

「見えるのか?」

「いやいや」

「音でも聴こえるのか?」

「ノンノン」

「匂いか?」

「目とか耳とか鼻なんかに頼ってちゃあ見つからねえな」

「?/?/?」

「分からねえかい?」

「ああ……」

「勘だ」

◆ (神田-14・04・14)

初老の男は、少年に背を向けて悠然と歩き去っていった。

「魔法使いのおじちゃん！ 元気でねえ……」

少年は力いっぱい手を振った。

「おや？ おじちゃん、そそつかしいなあ」

少年は魔法使いの忘れ物に気づいた。

「杖……拾っちゃおっと」

（末広町・14・06・02）

「てえんちよお〜！ この白のTシャツはやっぱり一番
上段のターコイズの右だったよね〜」

今日の『暮らしの衣料・神田川』は、棚卸に忙しいよ
うです。

「ほんと〜、グラデーションが超キレイじゃ〜ん」

「てえんちよお〜！ ポロシャツはこの左でいいんだよ
ね〜」

「てえんちよお〜！ ジーンズは下段のここでイイのお
〜？」

「てえんちよお〜！——」

あちこちから声がかかる店長は、鬱陶しそう。

「おいおい、そのTシャツはそこじゃない〜」

「ええ？う？ だつてえ」

「上の白、こつちだ」

（上野広小路・14・04・28）

◆
「ピエール!!」

「フランソワ!!」

「ピエール！」

「フランソワ！」

「ピエール」

「フランソワ」

「ピエール……」

「フランソワ……」

「ピエール、逢イタカッタワ。貴方ハドウ？」

「ウイ！」

「私ノコト、今デモ好き？」

「ウイ」

「愛シテクダサル？」

「ウイ！」

「他デ好キナ女ナドイラツシヤラナイワヨネ」

「ウイ」

「私一人デゴザイマスワヨネ」

「…ウイ」

「返事ガ遅レタノハ後ロメタイカラダワ。キット他ニ女
ガイルノヨ。ソウヨ、ソウニ違ナイワ！」

「ウイ…!?!…ノンノン!!」

（上野 14・04・29）



殺氣立っている。射幸心を抑えきれない男たちの人い
きれてむせ返りそうだ。

振られた壺が伏せられる。男たちの視線が刺さった。

静まり返る。男たちの息が止まる。賽の目も変わろう
か、という気迫が猛然と湧き上がる。

親からもらった名前が賽太郎である。無類の博打好き
であることは云うまでもない。

既に始まって小半時はたとうとしている鉄火場に乗
り込んできた。

賽太郎はいきなり張ることはない。まずは場の空気を
読む。これも親から仕込まれた博打の技と云えるか。

壺が開かれた。

男たちの舌打ちと小さな安堵が広がる。

賽太郎は呟いた。

「いきなり丁か……」

(稲荷町 14・05・03)



竜宮城ではオトヒメさま主催によるタロウさん歓迎レセプションが盛大に開かれていた。

鯛は質実剛健「勸進帳」の弁慶を演じた。平目はしなやかな魚体を生かして扇の舞を魅せた。小さな鯛も衆を頼んで見事なマスゲームを展開している。烏賊はダーツとなつて的へ向かつて飛んでいる。蛸は風船売っている。これといって芸のない伊勢海老は尻込みしていたが、意を決したのか、切腹して俎板の上に載り、身を挺してタロウさんをもてなした。

狂喜乱舞の宴は、尽きることがない。

「おい、あそこにいるのは……」

「ああ、アイツはこれと云った芸もないしな……」

「伊勢海老みたいに自分を切り刻んで俎板の上に載る、なんて度胸もないからなあ」

「でも……鍋なんか用意してるわよ」

「どうする気かしら？」

「おお、鍋を火にかけてるぜ」

「煮立った鍋に飛び込もうとしているよ」

「五右衛門でも演じるのかあ」

「ねえ誰か止めてよ」

「無茶するなあ」

「どうやら本気みたいよ」

「そりよそりよ」

「ちよと誰か止めて！」

「ヤツは本気だ！」

「止めろ止めろ！」

「きゃ~~~~!!」

「鱈はマジだわ!!」

(田原町 14・05・18)

作者解説

「マジ」とは『真面目』を省略した若者言葉である。



油蟬が暑苦しく鳴いている。大きな真夏の太陽が容赦なく照りつけている。

伴刑事はうだるような暑さの中、張り込み続けて今日で四日目だ。何を追ってるって？ そりゃも、

「星よー!!」

と、それはともかく、張り込みである。

伴の部下が、アンパンと牛乳を持ってやってきた。部下である若手刑事は、ほんの一瞬だが顔をしかめた。

「伴刑事、もういい加減で交代しましょうよ」

「いいや、コイツだけはオレの手でしよつ引く！」

「だってもう四日目ですよ」

「それがどうした」

「伴刑事も体力の限界……」

「オレを誰だと思ってるんだ！」

「そ、それは、元……」

「分かってるんだったらそれ以上云うな！」

「でも……」

伴刑事は若手刑事から、アンパンと牛乳をむしりとつた。

「アゲアゲ……」

アンパン一個を、一気に口へ放り込んだ。

「伴刑事、無茶するなあ……」

若手刑事はあきらめて、張り込み現場を急いで後にした。

電柱の陰に、伴刑事と若手刑事の上司の姿があった。

「どうだった？」

上司は走ってきた若手に尋ねる。

「ハアハア……ダメつす」

若手は息苦しそうだ。

「アイツも頑固だからなあ」

「ハアハア……もう堪んないつすよ」

「どうした？」

「伴刑事……ハアハア……」

若手は呼吸を整えようとしている。

「苦しいのか？」

「い、いえ、伴刑事……もう汗臭っ!!」

(浅草 14・05・26)

お客さん、終点です。